

特集

15年目の3・11

連載

S F C の、その先へ -Soaring beyond SFC-

—— 古野 微麗

のぞき見ルーティン

—— 伴野 崇生

KEIO SFC REVIEW

TABLE OF CONTENTS

No. **83**

特集

02 15年目の3・11

04 東北へ

06 座談会 15年の月日を経ても、あの日と向き合い続ける理由

浅野 永理香（環境情報学部3年）／ 岩本 詩乃（総合政策学部4年）／ 内田 賢吾（環境情報学部2年）
亀井 佑馬（政策・メディア研究科修士課程2年）／ 黄塚 真穂（環境情報学部4年）

12 インタビュー 教訓のために失われた命ではない ——研究者として向き合うSFCの防災

大木 聖子（環境情報学部准教授）

16 寄稿集 今わたしの思うこと

國領 二郎（元総合政策学部長）
徳田 英幸（元政策・メディア研究科委員長）
村井 純（元環境情報学部長）
西久保 有里（2013年度総合政策学部卒業）
福島 優希（政策・メディア研究科修士課程1年）

24 対談 体験と語り

國枝 孝弘（総合政策学部教授）
清水 亮（環境情報学部専任講師）

30 対談 災害とまちづくり

小林 博人（政策・メディア研究科教授兼環境情報学部教授）
横山 大輔（環境情報学部准教授）

36 編集部記事 災害の視点

連載

40 新 SFCの、その先へ -Soaring beyond SFC-

No. 1 古野 微麗（2021年度総合政策学部卒業）

44 のぞき見ルーティン

No. 3 伴野 崇生（総合政策学部准教授）

46 編集部員募集

48 編集後記

15年目の3・11

十五年がたった。長かったか、短かったか。その答えは、きっと人それぞれだろう。あの地震を身をもって体験した人、被災地に足を運んだ人、幼くて記憶にない人、遠く離れた場所からニュースの映像を見た人。私たちは震災に、それぞれの距離で向き合い、あるいは向き合えないまま、十五年を過ごしてきた。

記憶は遠ざかっただろうか。街の景色は変わった。報道は減った。時が過ぎ、経験していない世代も増えた。

だが、震災は終わっていない。

体験者と非体験者、被災地と非被災地——様々な隔たりの中で、記憶をどう継承するか。まちをどう作り、どう備えるか。日常の中に、災害への備えをどう織り込むか。

十五年目の問いを、ここから始めたい。

p. 4 東北へ

p. 6

座談会

15年の月日を経ても、
あの日と向き合い続ける理由

浅野 永理香×岩本 詩乃×内田 賢吾×亀井 佑馬×黄塚 真穂

p. 12

インタビュー

教訓のために失われた命ではない
——研究者として向き合うSFCの防災

大木 聖子

p. 16

寄稿集

今わたしの思うこと

國領 二郎 / 徳田 英幸 / 村井 純 / 西久保 有里 / 福島 優希

p. 24

対談

体験と語り

國枝 孝弘×清水 亮

p. 30

対談

災害とまちづくり

小林 博人×横山 大輔

p. 36

編集部記事

災害の視点

東北へ



震災遺構「タピック 45」跡



気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館
(気仙沼向洋高校旧校舎)



東北巡検行程

1日目

- 12:00 盛岡駅集合
- 14:00 宮古市へ移動。市内の見学
- 15:30 大槌町へ移動。研究会メンバーの案内で大槌巡検
- 20:30 三陸鉄道で釜石市へ移動。宿泊

2日目

- 9:00 ホテル出発。鶴住居町へ
- 11:30 陸前高田市にて、震災遺構「タピック 45」跡、東日本大震災津波伝承館の見学
- 14:30 気仙沼市へ移動。気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館（気仙沼向洋高校旧校舎）、杉ノ下高台慰霊碑の見学
- 16:30 南三陸町へ移動。旧防災対策庁舎の見学。宿泊

3日目

- 9:15 ホテル出発。旧戸倉中学校や五十鈴神社などを巡検
- 11:00 石巻市震災遺構大川小学校の見学
- 12:30 女川町へ移動。旧女川交番、女川町地域医療センターを訪問
- 16:00 仙台駅到着、解散

特別研究プロジェクトB（東北巡検—東日本大震災を巡る—）

【講義概要】

2011年3月11日に発生した東北地方太平洋沖地震とそれに伴う津波によって被害を受けた三陸沿岸部へ赴き、東日本大震災とはどのような災害だったのか向き合う。参加者は2025年度秋学期に大木研究会で学習したことを踏まえて、ひとり1つのテーマを決めて事前学習を行う。そのレポートを事前に共有してから現場に降り立つこととする。現地では語り部の話を聞き、遺構などの現物に触れる。帰京後にはグループワークを行い、最終プレゼンテーションとレポートを提出する。

【授業科目の内容・目的・方法・到達目標】

- ・東日本大震災における三陸の被災地を辿り、大規模地震津波災害について知る。
- ・現地にて、現物と現人に触れ、災害に向き合う。
- ・防災を行う意味を自分なりに考え、見つける。
- ・盛岡駅集合、仙台駅解散、途中移動はバスとする。
- ・事前学習をソロワ（編集部注：ソロワークの略称。一人で行うワークのこと）で行い、現地に赴く前に共有し、事後学習はグルワ（編集部注：グループワークの略称）で行う。

【準備学修（予習・復習等）】

- ・事前学習として、東日本大震災に関する新聞記事や避難学に関する書籍を可能な限り読み込む。（10時間以上）
- ・事後学習として、グループワークで得られた知見を自分なりにまとめる。その過程で新たに書籍などを読み、レポートを作成する。（20時間程度）

（シラバスより抜粋）



大木聖子研究会では3・11の十五年目の節目に合わせ、岩手県と宮城県の沿岸地域で特別研究プロジェクト（注）を行った。震災の記憶が薄れつつある今、参加者たちは現地で何を感じたのか。編集部は今回、東北巡検を終えた学生たちを訪ね、座談会形式で話を伺った。津波の脅威や住民の決断に触れ、これまでの固定観念を覆された学生たちが次の時代へ向けて紡ぎ出す等身大の防災論。そこから見えてきた防災観とは。

国土地理院の地図を広げ、巡検の路程を確認する参加者たち

座談会

15年の月日を経て、あの日と向き合い続ける理由

●震災の記憶と防災への原点
——まず皆さんの防災に対する意識の原点について教えてください。

内田賢吾（以下、内田） 僕の原点は、幼稚園の年長の時に東京で経験した東日本大震災です。黒い津波が漁船を押し流したり、仙台平野を飲み込んだりしているニュース映像を見て、「何が起きているんだろー」って。幼いながらに必死に理解しようとしていたのを今でも鮮明に覚えています。その恐怖が、防災意識の向上に繋がって、小学生の時には防災グッズを作ったこともありまして。二年前に一人で石巻を訪れた時、日和幼稚園という場所で当時僕と同じ年

だった子が亡くなったことを知りました。そこで「その子にもきっと、きっと明るい未来があったはずだ」と感じ、自分自身と照らし合わせて、言葉にできない悔しさや葛藤を切に感じました。この経験が、命を守らなければならぬという使命感を強くしてきたのだと思います。今回の特別研究プロジェクト（以下、特プロ）では、実際にあの日何が起こったのかを自らの目で確かめることができました。

浅野永理香（以下、浅野） 私も年長の頃、東京で東日本大震災を経験しました。とにかくすごく怖かった。心配性な性格もあって、「地震＝恐怖」という意識が植え付けられました。当時は何も知識

がないから、ただ怖い。防災というものを知ってからは、その恐怖を少しでも減らしたくて、本を読んだり調べたりするようになりました。地震は怖いものだという意識が強すぎるあまり、大木研究会に入った後も、これまでに起きた実際の災害には向き合えていませんでした。しかし、今回東北に行ったことが、そうした姿勢を改めるきっかけになりました。

●東北の地で崩れた固定観念
——特プロで実際に東北を訪れ、どのようなことを得られたと感じていますか。

方をしていただくことや、通学路のブロック塀で亡くなった女の子のニュースを見たことをよく覚えています。私の通学路にもブロック塀がありましたし、日常が一瞬で壊れることもあるのだなと。最後は、能登半島地震です。大地震が起きているのに、お正月の雰囲気

では、ニュースの映像が記憶の片隅にある程度です。自分にとって一番インパクトが大きかったのは、二〇一六年の熊本地震の際に、帰宅途中の電車で数時間閉じ込められた経験です。その後は特段地震や防災に関わることもなく過ごしていましたが、二〇二四年一月一日、能登半島地震が起き

けないな」という思いが湧き上がりました。高校までは自分だけに矢印を向けて生きてきたけれど、大学に入ってからはずっと、その矢印を周りに向けていきたいと考えていました。大木先生はいつも、自分にとって大切な場所を増やすことが防災だとおっしゃっています。自分自身を守ることも、自分の大切な人や場所を守ること。その二つを両立させることができるのが防災だと知りました。自分と周囲の両方に矢印を向けて学んでいけることに、すごくやりがいを感じています。



内田 事前学習で知ったことは、どうしても情報という形でしか頭に入ってきません。でも、実際に現地を回ること、自分たちが学んだことが実際に起きていたのだということをもっと感じることができました。もし大地震に自分たちが立ち会っていたら、どういう判断をしただろうか。そういうことを切実に考えられたのは、現地を訪れたからこそです。その意味でも、やはり、集団で現場を訪れたことが一番大きかったように感じています。以前、一人で石巻を訪れたことがあります。が、その時とは違い、今回は自分以外の存在をよりリアルに意識しました。「自分は逃げられても、足の不自由な人や子どもを連れた親はどう判断するだろうか」とか。

浅野 実際に津波が来た場所を訪れて、海の前に立ってみると、自分の身長のはるか上の高さの津波が押し寄せてきたということを想像せざるを得ませんでした。その凄まじさは、思い描くことすら難しいのだけれど、現地を訪れた今は、「津波〇メートル」という数字を見るだけで、現地でのあの身体感覚がよみがえります。一度現場に身を置いたことで、被災はしていない自分も、インターネットや文献から得た知識以外のことを自分の言葉で語れるようになった気がします。

岩本 普段、大木研究会では、災害が起きた直後にフォーカスを当てることが多く、その街の復興まで触れることはあまりありません。だから今回事前学習で女川町の復興を調べたことは良い機会でした。事前学習で知った、震災後の「防波堤を作らない」という選択や、そのような住民と海との関係は、現地に行って初めて理解で

きたような気がします。漁業が盛んな街では昔から海と人間の関係が築かれていて、住民には海に対するただならぬ思いがある。それは、訪れる前には理解できていなかった部分でした。そのような住民の思いが、住民参加型の意思決定によってきちんと復興に反映されたということも重要な点です。震災以前から築かれてきた信頼関係や協働関係が、災害後の未来の形に深く関わっていることが分かってきました。

黄塚 実際に訪れたからこそ得られたものばかりでした。特プロの三日間、それまで持っていた固定観念について、ずっと自問自答を繰り返していました。大川小学校の語り部の佐藤敏郎さんが何度もおっしゃっていた言葉が印象に残っています。「地震の直前まで、そこには普通の生活があった」。この言葉を聞いて、今までの自分は被災地を被災地としてしか見ていなかったことに気付かされました。



釜石市鵜住居地区防災センター跡

た。震災前の日常があり、そして震災後の長い復興の歩みがある。その時間の流れを想像できず、震災だけしか見えていませんでした。事前学習では、中学生の救命活動についても調べました。懸命な救命活動は素晴らしいけれど、救命活動の末に救えない命に直面することやご遺体を運ぶことは、果たしてまだ中学生にすぎない子どもたちが経験すべきことだったのだろうか。そう思っていました。

でも、中学校を訪れて、現地の人の話を聞き、年齢や立場で線引きすることの浅はかさに気付きました。

た。あの場にいた誰もが当事者として自分のできる役目を果たし、人を助けようと、そして生きようとしていたのです。

亀井 事前学習の段階で、震災について自分にはまだまだ知らないことがたくさんあることに気付きました。そのことに後悔や歯痒さを感じていました。でも、現地に足を運んだことで、防災研究に取り組んできた今それらを知ったことこそ意味があるんじゃないか。そう思えるようになりました。

●防災を語り直す

——実際に東北を巡り、皆さんの防災観にはどのような変化がありましたか。

内田 僕も黄塚さんと同じく、語り部の佐藤敏郎さんのおっしゃったことが強く印象に残っています。「訓練をやる上で、災害には『本番』があるということ」を僕たちは考えていなかった」というもので

す。僕自身、何度も避難訓練に参加してきたけど、実際には起きないだろうとか、うまくいくだろうなどと内心では思っていました。でも、経験者の声に触れて、その先に繋がる「本番」の存在を突きつけられました。これからは、自分だけでなく周りも巻き込みながら、先を見据えて訓練を設計し、参加しなければならぬと強く感じています。

亀井 僕はずっと、被災者ではない自分が防災を語ることの意味について悩んでいました。「被災し

ていない自分に何ができるのか」という葛藤に悩んでいたんです。しかし、今回の東北巡検で様々な人からお話を聞き、人によって経験も語り方も異なることを実感しましたし、その一つ一つに違う価値があるということも分かりました。以前見たとあるテレビ番組での「戦争体験者ではない人が、それぞれの視点で語り継ぐことにも意義がある」という話が、ようやく腑に落ちました。同じ震災の話でも、それぞれの視点で関わりを持つことに意味があります。今は

「誰でも防災に関わっていいんだ」と考えられるようになりました。過去の自分にもそう伝えたい。被災者ではない僕の視点から語る震災にも、価値があるのだと今は確信しています。

岩本 私も亀井さんの思いに似たものを持っていて、非被災者であることへの引け目が解消された気がします。ご自身も被災しているのに、被害の程度や状況の違いによって、「もっと大変な人がいるのだから、自分が楽しんだり悲しんだりしてはいけない」という複

雑な心情を抱いている方々がいます。こういうことが、現地で話を伺っているうちに分かってきました。やはり人の生死に関わることでですから、同じ被災者の間にも、言い表せない思いの差があります。そうであれば、災害を実際に体験していない私たちも、一歩引いた視点から研究を進められることもあるのではないかと、ということにも気付きました。今では「防災には誰にでも居場所がある」ということの本質を理解できたように思います。

浅野 私は、改めて防災とは何かについて深く考えさせられました。これまでは、地震や津波への恐怖を打ち消すために、何かしな



気仙沼向洋高校旧校舎を見上げる



津波が乗り越えた宮古市街の防潮堤



女川町の震災遺構交番

いといけないという思いで反射的に防災に取り組んできた部分があります。でも、防災をやっても助からなかった人もいれば、やっていなくても助かった人もいます。現地ではこの現実に触れ、自然の脅威を前にした人間の無力さ

を感じました。しかし、それでもやれることはやろうという気持ちも持つようになりました。自然の凄まじさを認識したからこそ、これからも防災を続けていくんだという覚悟が、以前よりも強くなった気がします。

黄塚 防災を考える時の視野が大きく広がりました。これまでは、未来に起こる地震で家族や友人を守ることを最終的な目標として、それに執着していました。被災地の事例を聞いても、自分の家族や友人がその中にいたらどうなっただろう、という想像をいつもしていました。でも今回、震災前の日常や震災後の復興の歩みに触れ、自分が目を向けている範囲がいかに狭いかということに気付かされました。大川小学校で話を聞いた時は、「もし自分の家族だったら」と想像するのではなく、会ったこともない子どもたち自身のことを考えられるようになっていました。震災から守るべき対象が、

自分の知っている範囲から、もっと広い世界へと広がっていくような、そんな変化が自分の中で起きました。

(構成…高坂真優佳・岡田奈和美)

注 特別研究プロジェクト…研究会を担当している教員が開講する、学期中ではできないような研究を夏季・春季休校期間中に集中して行う科目。



浅野 永理香 (あさの・えりか)
環境情報学部3年



内田 賢吾 (うちだ・けんご)
環境情報学部2年



岩本 詩乃 (いわもと・しの)
総合政策学部4年



黄塚 真穂 (きづか・まほ)
環境情報学部4年



亀井 佑馬 (かめい・ゆうま)
政策・メディア研究科修士課程2年

取材後記

今回の取材に当たり、私たち編集部は、特別研究プロジェクトの事前知識共有会と事後報告会に参加する機会を頂きました。

情報としては知っていた出来事が、現地に赴き、語りに耳を傾けることでリアリティとして立ち上がった時の衝撃。その一方で、ほんとうのことは想像を絶するものであり、決して分かり得ないという事実。そして、ずっとそこにあり続けている、人々の日常と暮らし。

経験と感情はその人自身のものであり、見えない壁は、当事者・非当事者にかかわらず、いつだって一人一人の間に横たわっています。東北を巡りながら、彼らの目には本当に様々なものが実感を伴って映ったはず。その景色も想いもまた、私たちには分かり得ません。けれど、少しでも近づこうとすることはできるはず。

「分かってほしい」「分かりたい」という関係が成立することはかけがえないこと。特別研究プロジェクトの報告会で、ある学生が語っていた言葉です。他者の存在を確かめながら、決して分かりきることができないと分かっている、それでもなお、想像することを諦めない。特別研究プロジェクトに参加した学生たちの言葉は、そうして積み重ねられてきた真摯な営みの先に紡ぎ出され、溢れているようでした。(岡田奈和美)



教訓のために失われた命ではない ——研究者として向き合うSFCの防災



大木 聖子

東日本大震災から15年。その体験や記憶の風化にあらがうように大木聖子研究会は日々研究にいそんでいる。特別研究プロジェクトや普段の研究会活動の根底には、一体どのような思いがあるのだろうか。大木聖子先生の考えるSFC流の防災学に迫る。

●読者の皆様へ、最初にお伝えしたいこと

——東日本大震災から十五年が過ぎました。あの地震を振り返って、防災の専門家である大木先生の心に最初に浮かぶことは何でしょうか。

「東日本大震災は、私たちに教訓を与えるために起きたのではない」。私が皆さんに最初にお伝えしたいのは、このことです。ましてや、あの日亡くなった方々は、生き残った私たちの教訓になるために生まれてきたわけではありません。

大川小学校に通っていたお子様を震災で亡くした方がいます。その方は、今は語り部をしていらっっしゃいますが、「世の中の教訓にするために、うちの可愛い娘を産んで育てたわけじゃない」とおっしゃっていました。この言葉の意味が、私自身も親となり、子を育てる中でだんだんと分かるように

なってきました。せめて教訓として記憶に留めてほしいと願う一方で、どんなに教訓にしても、その子や家族から奪われたものは戻ってこない。そのことを決して忘れてはいけません。守るべき命があるからこそ、防災がある。私たちの研究のために防災があるわけではない。まずこの点を皆さんによく理解していただきたいと思えます。

●久しぶりの東北、変わらない学生たち

——東日本大震災から十五年目の今、被災地を訪れる特別研究プロジェクトを開講したのには、どのような思いや意図がありましたか。

今回、コロナ禍を経て、3・11に時期を合わせて学生たちと東北を訪れたのは数年ぶりでした。今の学生たちは、震災当時はまだ四歳くらいだった世代です。「この

子たちを震災の現場に連れて行ったら何を感じるんだろう」という思いで企画しました。現地での彼らの姿を見ていて感じたのは、時間がたっても変わらない真摯さです。

防災に携わる立場としての責任感や重圧を、自分たちなりにどう捉え直すか。そういう思いで被災地と必死に向き合っている姿は、二〇一三年に大木研ができたばかりの頃の学生たちと全く同じでした。

●今も心から消えない研究者としての悔恨

——東日本大震災について、研究者の立場として感じていることを教えてください。

私は、あの日、すでに地震学者として身を立てていました。そのような立場にありながら、二万人もの人々の命を失ったわけですから、地震学の末端にいる者として、私

は今もそのことを重く受け止めています。

えています。

当時は、「科学には限界がある」なんて言うの研究予算をもらえなくなってしまう、という論調さえありました。でも、科学に限界があるからこそ、津波が来たら逃げなければいけないし、逃げなかったらどうなるかということをもっと真剣に考えなければいけなかった。そしてそれを伝えること、分かってもらおうとすることに対して本気にならなければいけなかったんです。地震を起こしたのは地球だけれども、私にも何かもつとできることがあったはずです。この悔恨は、今もずっと変わりません。

だから、二度と同じことを繰り返したくない。ただ、私がいかに張り詰めていると、周りの人がたじろいでしまいますから（笑）、楽しい雰囲気を作ること大切にしています。でも、あの時の悔しさだけは忘れずにいたい。そう考

●技術より先に思いやりをデザインする
——以前、SNSで震災を揶揄した高校生が批判を浴びるという事態がありました。このような軽はずみな発言をしてしまう背景には何があると思いますか。

そのような発言をすることが今の若者たちの標準的な感覚だとは私は思いません。一人の逸脱に合わせて社会のルールを厳しくするよりも、むしろ「なぜその子はそんな表現をしなければならなかったのか」ということに目を向けたいですね。

私たちがやっている防災教育は、単なるサバイバル技術の向上ではありません。いかに素早く机の下に隠れるかとか、校庭まで何秒で行けるかとか、そういうことを目指しているわけではありません。自分が誰かに守られている状

況を想像することで、自分が誰かを守る側にもなれる。私たちが防災教育を通じて伝えたいのは、このことです。たとえば、「自分が怪我をしたらどう声をかけてほしいか」を考える教材を作ったのですが、この教材によって、子どもたちの心に思いやりが育っているという声を現場の先生から頂きました。

勉強はAIに任せられる時代だからこそ、人間としての心の豊かさは今まで以上に教育の中に込めていきたいのです。

●学びとは、世界を違う目で見ること

——これから起こりうる災害に対して、地震学ひいては学問はどのように役立つとお考えですか。

学問は、新しい世界の見方を提供してくれるものです。地震学という窓を通せば、ただの風景も地球の長い歴史の一部として見えて

きます。今回の東北訪問を通じて、学生たちも新しい窓を手に入れ、世界を少し違う角度から見ているはずです。

人間は生物として「嫌なことは忘れる」ようにできています。震災からある程度の時間がたつと、対策は疎かになっていきます。だからこそ、防災を単なる「対策」としてではなく、子どもとのコミュニケーションや教育の一環として新たにデザインして、意識だけでなく行動も変えられるような形で届ける。それが、私たちが果たすべき役割です。地震学の領域を広げて、地面の上にあるまちやそこに生きている人の暮らしの幸せを加味した地震学を作りたい。

この気持ちはSFCに来た時から変わりませんし、SFCでしかできないことだと感じています。防災行動を幼稚園生に伝えるためにダンスを使っていますが、発想は学生から生まれたもので、私一人では思い付かなかったことです。

防災とは、人とまちを大切にし、大切な場所を増やすこと。そのようなコンセプトのもとで、熱意とやる気と思いやりを持った学生たちと様々なことを持ち寄ってやってみる。こういう防災のあり方こそ、とてもSFCらしいものだと思っています。

災害という窓から世界を見るのは、とても怖くて勇気がいることです。だからこそ、それを支える人生の豊かさや、語り合える人との繋がりを、学問を通じて育んでいきたい。ただ生き残るためだけではなく、災害という窓を通して世界を見るのに十分な準備を整えてあげる。防災学はそんな学問でありたいと私は願っています。

（構成：高坂真優佳・岡田奈和美）



大木 聖子（おおき・さとこ）

環境情報学部准教授。

専門は、地震学、災害情報、防災教育。

東日本大震災を振り返って ～情報インフラの役割～

元政策・メディア研究科委員長
徳田 英幸

東日本大震災から十五年が経過した。被災された方々にとっては、一言では語り尽くせないほど長く険しい道のりであったことだろう。各地でコミュニティの再生が進む中、いまだに街の活力が十分に戻っていない地区もあると聞く。復興は、人々の暮らしやつながりを取り戻していく長期的な営みであり、その難しさを改めて感じさせられる。

一方、この震災は、日本社会に対して「情報インフラのあり方」を根本から問い直す契機ともなった。震災直後、多くの通信設備が停電や津波被害によって機能停止し、携帯電話は輻輳によりつながりにくくなり、人々は安否確認や避難情報を得ることに苦労した。正確な情報へアクセスできないことが、どれだけ避難行動や救助活動の判断を遅らせたことか。そのような状況下でも、インターネット上の限られたSNSなどを通じて家族の安否確認や避難情報の共有が行われ、人々は情報インフラが電気・水道・道路と同様に生活の「生命線」であることを強く認識した。

この十五年間で、情報インフラの役割

は大きく進化した。震災当時は、通信の主目的は「つながること」そのものにあつた。しかし現在では、情報インフラは単なる通信手段ではなく、金融、物流、医療、行政、教育、交通のみならず、エネルギー、防災、農業、宇宙、防衛などを含む、あらゆる社会システムを支える基盤へと進化した。クラウド、AI、IoT、5Gの普及によって、社会システム全体がサイバーフィジカル融合型へ移行した結果、通信の停止は単なる不便ではなく、社会機能そのものの停止につながる重大なリスクとなった。

そのため、震災後の日本では「重要インフラ」としての通信ネットワーク強靱化が急速に進められた。通信局舎やデータセンターの耐災害化に加え、基地局の長時間停電対策、伝送路の多重化、海底ケーブルやバックボーン網の冗長化など、多層的なレジリエンス設計が進展した。私が所属する(国研)情報通信研究機構においても、オール光ネットワークの共通基盤、AIによるネットワーク状況の監視技術、地方自治体へ導入された災害時に途切れない自律分散型NerveNetや



徳田 英幸 (とくだ・ひでゆき)

国立研究開発法人情報通信研究機構顧問。
慶應義塾大学名誉教授。

スマホとAIを活用し被災情報を収集する防災チャットボットSOCDAなど、平時にも災害時にも活用できるさまざまなシステムの研究開発と社会実装が進められている。

SFCは創設以来、問題発見・問題解決型の教育研究を通じて、既存分野の境界を越えながら、新しい情報インフラや社会システムを構想してきた。未来社会に向けて、技術・社会・政策・人間行動を統合的に捉え、異分野の知を融合しながら「未来の情報インフラとは何か」を自ら構想し、社会実装できる次世代人材が育っていくことを期待している。

まだ卒業できない

元総合政策学部長
國領 二郎

十五年前、未曾有の大災害の時とともに過ごした学生諸君には、特別な思いがあります。使命感を胸に被災地支援へ向かった学生、開始が遅れた春学期を待ちながら学びを深めていった学生——それぞれが「自分に何ができるのか」を真剣に考え、行動していました。教職員もまた、自ら被災の影響を受けながら、学生の命を守り、被災地を支援するため懸命に知恵を絞っていたように思います。

東日本大震災から十五年。二〇一一年七月発行の本誌四十八号では震災直後の混乱の中でのSFCをアンケートや寄稿を通して誌面に残しました。当時、学部長として対応された國領先生と村井先生、そして研究科委員長として対応された徳田先生。本記事では四十八号にもご寄稿いただいた三名の先生方に、再びご寄稿いただきました。加えて、当時現場で課題解決に奔走した卒業生と、幼少期に震災を経験した学生にも文章を寄せていただきました。

異なる立場で震災を経験した五名が綴る、十五年の歩みと今の思いに触れます。

今わたしの思うこと

その後も、コロナ禍や中東での紛争など、世界ではさまざまな出来事が続いています。東日本大震災の記憶が少しずつ薄れていくことは避けられないのかもしれませんが、忘れなくてはならないことは、次の世代へしっかり引き継いでいかなければならないと思っています。

個人的に、現役の慶應義塾の皆さんにぜひ伝えておきたいことが一つあります。それは、あの年の卒業式のことです。

震災直後であったため、予定通りに集まって行うことはできませんでした。もちろん、インターネットによる卒業式は実施しました。まだストリーミング配信が珍しかった時代でしたが、SFCの意地と誇りをかけて、高い水準のものを実現できたと思っています。学生諸君の前向きな姿勢のおかげで、とても温かい会になりました。同時中継していたツイッター(現X)ハッシュタグにはOBも参加してくださり、大いに盛り上げてくれたことも忘れ難い思い出です。

それでも、やはり皆が一堂に会する卒業式を実現したかった——当時の学部



國領 二郎 (こくりょう・じろう)

共愛学園前橋国際大学副学長、教授。
慶應義塾大学名誉教授。

長として、その思いは今も残っています。実は卒業十年の節目に改めて開催しようと考えていたのですが、二〇二一年はコロナ禍と重なり、再び断念せざるを得ませんでした。その時は本当に天を仰ぐ思いでした。

そうこうするうちに、私は慶應義塾を定年退職し、自ら動く立場ではなくなりました。次の機会は、おそらく二〇三六年、卒業二十五年の皆さんが卒業式に招待される時ではないかと思っています。その時には、ぜひ壇上に上がっていただき、改めて皆さんの卒業をお祝いしたい——そんな日が来ることを心から願っています。

実録：2011年3月 S F C

元環境情報学部長
村井 純

私は環境情報学部部長でした。総合政策の國領学部長、政策・メディアの徳田委員長。学部長補佐（総務担当）の土屋教授などとともに対応しました。語りたいことは沢山あるのですが、当時書いた学生へのメッセージがSFCの誕生から現在、そして未来へと貫く私の思いなので、これを再掲します（編集部注：左頁掲載）。それでも、三つの思い出は伝えたい。一つ目は二〇一一年に卒業をした諸君との無念の共有です。多くの学生は晴れ着などの予約は終わっていたが、集会自粛で当日の式典はできなかった。清家篤塾長にお願いして慶應として初めてのオンライン卒業式を行いました。三田で参加していた私と國領さんは東名をぶっとばし、行き場がないのでSFCに晴れ着を着てこっそり集まっていた卒業生たちと合流しました。二つ目は安否確認です。授業の欠けや質問などのオンライン運用が確立していたSFCではいち早くこのシステムを安否確認に利用することになりました。三月十三日の二十三時のメールです。

SFCの皆様、
SFC・SFSを利用した安否確認
情報を開始しました。

ご協力をお願いします。

個別IDを含むURLの入ったメールが到着するので、そのURLから
確認情報を入れてください。

SFC・SFSにログインしてもできます。

3学部2研究科の全学生にも順次伝
わります。

よろしくお願いします。

村井純

その結果、少なくとも当時の社会では
考えられない、驚くほど高い確認結果が
ありました。

村井先生

土屋大洋です。総務（危機管理）担
当からのお願いです。

すでにご案内の通り、学生および教
職員に安否確認を求めるメールを
送っております。3月27日15時現在
の回答率は以下の通りです。

学生（総合） | 1712名 /
1930通知（89%）
学生（環境） | 1716名 /
1913通知（90%）
学生（政メ） | 447名 / 520通
知（86%）

そして、三つ目は、特別休校期間です。
三月十二日から被災地に飛んだ多くのS
FCの卒業生や先輩たち。連休まで休校
にして、学生たちに伝えたメッセージの
内容は、今このテーマでの回想だけでな
く、SFCの準備から現在まで教員とし
て関わってきた私自身の誇りなのです。



村井 純（むらい・じゅん）

慶應義塾大学グローバルリサーチイ
ンスティテュート特別特区特任教授。
慶應義塾大学名誉教授。

特別休校期間

平成 23 年 4 月 1 日

「この期間を利用した東北地方太平洋沖地震に関わる社会貢献活動について」

総合政策学部長 國領二郎

環境情報学部長 村井 純

政策・メディア研究科委員長 徳田英幸

SFCでは塾生諸君や教職員が様々な人と知恵と力を合わせ、未来社会の課題を発見し
解決していきます。この歴史的な災害と社会の危機に際しても、それぞれのできることを
思考し、人を支援し力を与え社会を復興するプロセスや、原子力発電に関する環境とエネ
ルギーの緊急課題の解決など、未来の日本と地球社会を創造するための活動への果敢な取
組みを始めるでしょう。そのために、サイエンスとテクノロジー、ボランティアなつなが
りと自発的な協力を形成するさまざまな方法、ルールの設定や国の制度の提案といったS
FCの多面的な知が結集されるに違いありません。

4月の特別休校期間は、そのためにそれぞれが出来ることを自ら考え、一方方向の支援
や援助という視点に陥らず、互いに寄り添い、相互に学び、そして啓発しあうプロセスを
通じて社会のきずなを確認し、共に学び、社会において行動・実践する期間とします。

同時に計画停電などによりキャンパスの支援能力が低下している中で、諸君の安全面も
心配しています。特に、直接被災地での活動をする際には、各自が慎重に計画をたて、安
全と健康に留意して取り組んでください。

5月にキャンパスに集い、特別休校期間中に醸成したそれぞれの経験や思いを分かち合
い、みんなで力を合わせて新しい出発をめざしましょう。

震災から15年 —「茨城」での被災経験を振り返る—

政策・メディア研究科修士課程1年
福島 優希

純粋な志が見せてくれた景色と授けてくれた宝物

2013年度総合政策学部卒業
西久保 有里

私の実家がある桜川市は、茨城県の県西部に位置する。筑波山を望む地域で、牧歌的な田園風景が広がる。地元で耳にする一本調子の訛りは、神奈川県から帰省する時の私を落ち着かせてくれる。

二〇一一年三月十一日、小学一年生の私は、人生で初めて震度六弱の地震を体験した。校庭の地面が激しく揺れ、学校の窓ガラスは耳を劈くような音を立てていたのを今でも覚えている。実家に帰ると、実家と同じ敷地に立つ祖父母宅の様子が様変わりしていた。大量の瓦が落ち、断熱材が見えるほど外壁は剥がれていた。その様子は、まるで大地震の規模を物語っているようだった。その日の夜に家族で避難した避難所では、見ず知らずの方から袋に入ったお菓子をいただいた。その思い出は、中学受験を経て入学した水戸市内の中学に進学しても、教室や帰りのコンビニでそのお菓子を見る度に思い出された。

今となつては、私の小学校時代は一部損壊した実家と全壊した母屋の再建とともにあったと思う。母方の祖父母は家が再建されるまで市内にあるアパートに入

居し、私も、よく実家とアパートを往復していた。再建されるにあたって、全壊となった母屋は柱だけとなり、跡形もなく取り壊されていった。二〇一一年三月十一日の朝まで確かにあったいくつもの大切な思い出だけが私の心の中に残った。幼いながらも、実家と母屋の再建に携わる沢山の工事関係者を見て、何度も心の中で「私にも何かできることはないか」と思った。

震災から二年が経ったある日、私は、母屋の鉄骨に「想い」を記すという小さなイベントに参加させてもらった。沢山の工事関係者に見守られながら、再建される母屋の鉄骨部分に「地震に負けない家」と記した。まさに、その日が実家と母屋の「復興」の日だったように思う。

茨城県は「復興」が早く、いつの間にか東北の被災地を支える地域になっていた。「被災地らしさ」はもう無いかもしれないが、震災の記憶を刻む地域ではある。

私は、この二十二年間、沢山の『人』を支えられて生きてきた。今度は、誰かを支える『人』になる時である。そう思つて、日々の防災研究に取り組みうと思う。



福島 優希 (ふくしま・まさき)

大木聖子研究会所属。

当事者からの災害体験を「単なる歴史上の1コマ」に留めず、日常的な経験や知恵とを結びつけることで、誰もが次世代への「語り手」となれる仕組みを、科学コミュニケーションの視点から幅広く研究している。

震災当時、湘南台で一人暮らしをしていた私は、計画停電の期間を仲間たちと過ごしていました。暗くて寒い部屋に、充電したPCを持ち寄って、毛布にくるまって、被災地に入る手段を模索していました。一年間の学生生活で「課題解決にはまず現場に足を運ぶこと」というSFCイズムにすっかり染まっていた私は「現地に行って、自分にできることをやる」—それしか考えていませんでした。結果的に三月末と五月の連休中の二度にわたって被災地を訪れることになるのですが、そこから十年にわたる被災地との関わりが始まります。

社会人になつてからも縁あつて、毎年三月十一日は福島県双葉町（福島第一原発のお隣）で過ごしていました。けれど関わりが深まるほど、見たくないもの、知りたくないことにも出会います。「被災地支援」という言葉の裏で、嫌な思いをした人がいたり、不透明な金銭の流れがあつたり、報道とは全く異なる事実が存在したり……学生の時は守られた中で活動ができていたのですが、社会人になると阻害要因にも向き合わないといけな

いわけです。これが意外と削られる作業で（ということは十九歳の私に教えてあげたい）、そんな時に自分を支えてくれたのは、怖いものを知らず、自信に満ち溢れていて、純粋な志ひとつでどこにでも飛び込んで行けたあの時の私でした。それから、純粋な志を、純粋な気持ちで応援してくれるSFCで出会った仲間たち。学生の時は半信半疑だったのですが、彼らは本当に困った時に本気で向き合つて伴走してくれました。

震災直後に海岸線の国道を走りながら見た町の風景、福島のお母さんたちが振舞ってくれた手料理の味、八年経って地域住民の方々が原発への思いを聞かせてくれた夜。防護服を着て真っ先に飛び込んだ帰還困難地域は、それまで聞いていた通りとても美しい場所でした。東北で出会った数々の瞬間は私にとっては大きな宝物です。この宝物を授けてくれたあの時の私に感謝をしつつ、仲間を頼つて、自分にできるかたちでこれからも社会と関わっていけたらと思います。



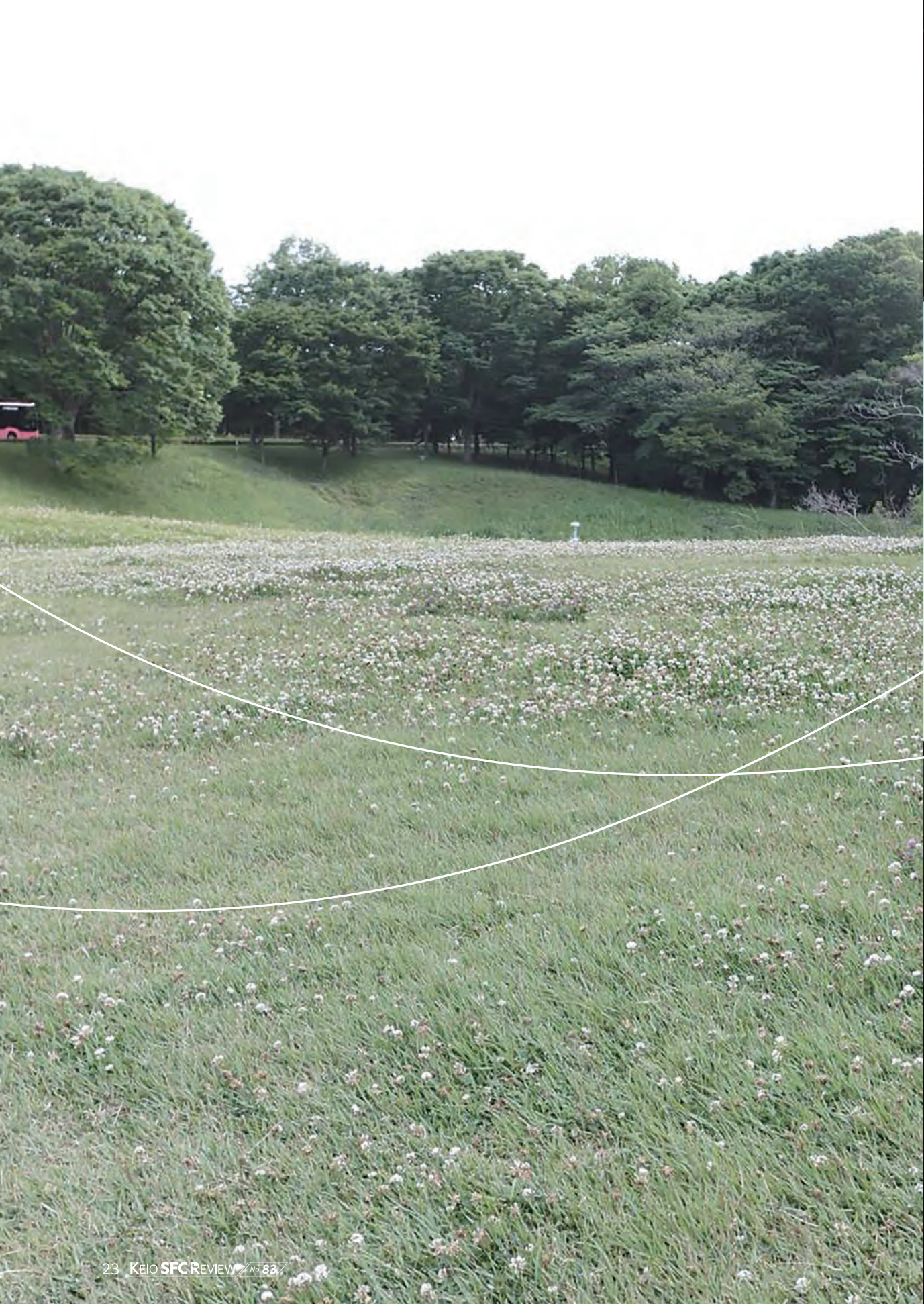
西久保 有里 (にしくぼ・ゆり)

Studio MOOD Tokyo 合同会社代表。

在学時は國領二郎研究会に所属。

民間企業にて新規事業開発やコンテンツプロデュースに従事したのち、独立。

写真は、当時の活動で被災後の双葉町に初めて入った時のもの。



体験と語り

東日本大震災では、無数の命と暮らしが喪われた。その体験は震災当時から多くのメディアを通じて語られてきた一方で、その語りの中でこぼれ落ちていったものもある。災害という大きな出来事の体験を語ることは、どのような営みなのか。國枝孝弘先生と清水亮先生に話を伺った。

●話す／語る／物語るの違い
——災害による喪失体験を語ることは、どのような営みなのでしょうか。

國枝孝弘先生（以下、國枝） まず「語る」という言葉が出ていますが、「語る」と「話す」とは別の行為です。例えば、学生が「昨日の夜、友達と語っちゃってさ」と言ったら、普段はしないような深い話を一晩中していたように聞こえますよね。そう考えると、語ることはなかなか敷居の高い営みです。その意味で喪失という重いテーマを語ることは、実は大変なことなのではないでしょうか。

清水亮先生（以下、清水） 私も、

卒業論文で戦争体験の語り部の研究をしていた際に、「話す」と「語る」の違いを意識していました。とりとめもなく話すことは誰にでもできます。しかし、語り部の前には聴衆がいて、決まった時間内で内容を整理して、分かりやすく印象的に伝えるというパフォーマンス能力が問われます。よく言われるのは、話が語りに整理されるときれいにまとまってしまう面もある、ということですが、物事の伝達には良い効果を及ぼしますが、一方で、分かりにくいことや、都合の悪いことは削ぎ落とされ、良くも悪くも整えられてしまうこともあります。

國枝 今のお話を僕が開講してい

るので。

清水 その一方で、共有されているためには物語へと形を変えていく必要もありますね。そこが非常に難しいというか。

國枝 そうですね。語りに整理されていることと、そこからずれていることの両方を考えることが大事です。また、聞き手との相性や場所、人間関係もとても重要な点ですね。

清水 実は、私は震災の経験を人前で語ったことはありません。でも、今まさに聞き手が現れたことによって、今日初めて三月十一日に何をしていたかを語ることにあります。私の話は何も大したことではないですけれども、喪失の経験は重く、そもそも聞きづらいものです。「どう思うか」とうかつに踏み込めば、暴力性を帯びてしまいます。ただ、聞かずに放置してしまえば、責任追及や再発防止の観点でも問題があります。

●語りに表れないもの

——様々な体験や思いがある中で、語られないことは多くあるのでしょうか。

清水 まず、喪失の経験を語りたくない、そもそも思い出さたくないという感情があることを無視するわけにはいきません。本当に深刻なトラウマを持った人が語り部になるのは、とてもハードルが高いことです。何より、語られないことの中心には「死者は語れない」という事実があります。

また、トラウマを持った方が語り部になることはとても貴重です。しかし、特定の方々だけが引っぱり回されるのも良くありません。「他の人と比べて、自分はそこまで深刻な被害を受けたわけではない」と語りを控えてしまう人々もいます。

國枝 当時、東北学院大学にいらした金菱清先生がお書きになった話を思い出しました（注1）。震

る「言語とヒューマニティ」という授業で使う表現に当てはめると、「物語」と言えるかなと思います。物語には、登場人物がいて、プロットがあり、考え抜かれた流れがある。そういった形で、物事の要素が整理されると伝わりやすくなります。喪失体験を語ることが、語り手にとって、自分の考えを振り返り整理するのに役に立つ側面があるのも事実です。ただ、ノイズのない語りを受け取ることが本当に分かっている状態に繋がると、それは問いたくなりますね。あまり考えられていなかったり、脱線していたり、うまく繋がっていない破片のような話であったりする方が、不意に刺さることもあ

災で年老いた両親を亡くされた女性の話です。その方がグリーフケア（注2）の集いに参加したのですが、そこで、マスコミが集中したのは、赤ちゃんを亡くされた夫婦に対してでした。また、会全体は親を亡くした子どもたちへのグリーフケアに力を入れていて、結局女性自身の悲しみを語れなくなりました。

清水 伝える側は震災や戦争の深刻さを伝えようとするからこそ、そうした分かりやすい対象に注目します。けれど、それは意図せず体験の序列を生み出しかねません。語りにおいては、伝えられれば解決、というわけではなく、まずは時間をかけて、このような入り組んだ構造を把握する必要があります。

作家の横光利一が、戦争中に疎開した時の体験をもとに「夜の靴」という小説を書いています。都会を空襲で焼け出されて命からがら逃げてきたという体験が、空襲が



清水 亮



國枝 孝弘

なかった田舎の農村では全く理解されない。両者の間のギャップを、横光は「不通線」という言葉で表現しています。両者の間に「不通線」というギャップがあるから、話を通じない。非体験者は無感動なままで、体験者は自分の話を通じないから怒りが湧いてくる。

今から戦争の時代を振り返ると、空襲や食糧難で一様にひどい経験をしたように見えるでしょうが、実際はそのひどさにもかなりのグラデーションがありました。戦後しばらくたって、メディアの報道などを通して、「みんなが同じ戦争を体験した世代」という信憑が出来上がっていったのです。

おそらく、震災を経験した世代にも「不通線」はあるのではないのでしょうか。それは、私たち一人一人が3・11の時にどこにいて何を体験したか、という個人的な体験にも強く関わっているはずです。

●それぞれの3・11
——お二人にとって、3・11はどのような体験なのでしょう。

國枝 僕は横浜の自宅にいました。揺れが激しく、本が崩れてぐちゃぐちゃになりましたが、特に被害というほどのものはなかったですね。一緒に共同研究をしていた先生に仙台在住の方がいらったのですが、その先生は「大丈夫か」という連絡をたくさん受け取ったそうです。でも、彼自身は内陸部にいたので、津波も来ていないし、家も壊れていないし、人の死も見えていない。東京からは東北全体で一括りに見られてしまい、自分が心配されていることに後ろめたさを感じたとおっしゃっていました。

清水 自分は三陸にいたわけではないのに、という意味ですね。私も、後ろめたさや負い目の話をしなければと思っていました。

私は3・11の時、岡山にいたん

出てくるのではないのでしょうか。

●語りは生き物

國枝 語りにには、記録では名指されなかったものが名指され始める可能性にあります。語り手には自分の体験と結びいている記憶があって、それを思い出しながら語っていくからです。

抜粋、洗練、凝縮された記録とは違い、語り始めると思いがけないことが口から出たりして、後から「自分はあんなことを語っていたんだ」と振り返る。そんな「事後性」は、語りの特徴です。

清水 語りの中に話が侵入してくる瞬間ですね。そうしたダイナミズムは大事だと思います。大学生時代、被爆者への聞き取りのプロジェクトに参加したことがあります。あるおばあさんが後半ずっとお孫さんの話をなさって、翌週、「（関係のない話をしてしまった）申し訳ありませんでした」という丁寧な謝罪の手紙を頂いたという



映画『息の跡』のパフレットなど清水先生が授業で紹介している震災関連資料

出来事がありました。私はそれにすぐ違和感を覚えました。孫の話は、被爆と本当に無関係なのだろうか。孫と出会える喜びも、生き残ったからこそ感じられるものだという意味で、戦争体験の話だったかもしれない。

國枝 それは怖いことですよね。「こういうことを聞きたいんでしょ」という圧力を感じて、期待に沿うように話してしまう。「期待を外しちゃったな」と思わせてしまつたら、その語り自体がこちらが狙っているものになってしまう。

清水 脱線を許さず、語ってほし

です。大学生時代はよく自転車旅行をしていて、その日は大学一年生の春休みの、東京から九州への旅の途中でした。ちょうど地震があった時間は、とある丘の上で昼寝をしていました。大地はびくりとも動きません。その日の宿で「すごいことになっているらしい」と聞いたんです。ただ、当時はスマホがなかったので詳しい情報が随時入ってくるわけでもなく、「大地震が起きたから、しばらく帰れないんだな」と覚悟して、そのまま旅を続けました。

そんなわけで、私は震災後一週間の混乱をスキップしており、それを負い目に感じています。私は「不通線」の伝わらない側にいるのかもしれない。その後、大学などでボランティアの募集があると、「ともかく行かなきゃ」という思いがありました。それは、「自分が助けたい」という使命感というよりも、「コミットしなきゃいけない」「無関心ではいけない」という負い目から生まれていたように思います。負い目には人を動かす力もあります。でも、私に語る資格があるのかは怪しいです。

清水 というより、家族から「危険だから帰ってくるな」と言われたので、予定通り瀬戸内海を旅して北九州まで行きました。地震の何日後かに、瀬戸内海の島のコンビニにあった新聞で「原発の建屋爆発」の見出しを見て、「しばらくはこの辺りで避難生活を送るのかもしれない」とぼんやり考えま

國枝 少し話題がずれますが、その「語る資格があるのか」という考えは、自分が体験しているかいなかという、0か100かで考えてしまう、体験の絶対性から来ているのでしょうか。社会的に大きな災害の場合は、特に体験を非常に神聖なものとして扱う傾向が

いことを語らせるような現場は、あらゆる物事の繋がりを断絶しかねません。語りは変化を含むという意味で、生き物なんです。その点で語りの身体性は無視できないと思います。現場で聞く声は空気の振動で、身体を直撃するものです。三時間くらい人の話を聞いていると、耳で聞いているけれど、皮膚で吸収しているような感覚が湧いてきます。語り継ぐことを考える上で私が大切にしたいのは、そういう身体性を手放さないことです。

リアス式の地形や、集落が丸ごと流された広い更地。その場所に身を置いて、語りが身体にリンクしないと腑に落ちない。だから私は現場を歩いたり、自転車ですつたりすることを大事にしています。自分の身体性を駆使して、この空間で一人の個別具体的な人間が何をどう体験したのかを少しでも深く理解しようとする。そういう語りの受け継ぎ方もあるのではない

いかと思っています。

國枝 物語は整理されたストーリーだけれど、語りは身体で表現するものです。言葉が詰まったり、何度も言い淀んだり、同じ言葉を繰り返したりする。破綻する直前のような言葉の震え、それは僕の中では詩に近いです。そうした震え自体が一つの言語だと思っています。言葉は道具の一種だけではない。自分の自由には扱い切れないものです。

●語りが生まれる
——「語る」という行為はどのような場所、時間で行われるものなのでしょうか。

清水 例えば、震災の伝承館というものがあります。そのようなミュージアムができると、地域で語り部が発掘されます。語る舞台が作られることにより、物語が生まれるわけです。しかし、そうして生まれる語りには、舞台による

制約が伴います。展示に合わせた語りと、「展示の趣旨には合わないけれど、私の体験にとっては欠かせない」という語り手の思いとがせめぎ合うことがあります。

國枝 ミュージアムのような舞台がなくても、聞き手の存在があれば、どこでも舞台になりますよね。

清水 そうですね。私がオーラルヒストリーを行う時も、舞台を作っているつもりでいます。「私なんか喋ることないの」と言う方がとても重要なことを知っていることがよくあります。

以前宮城県の大鹿半島を旅した際に、被災して高台に移転したという民宿に泊まりました。オーナーのおばあさんと近所の漁師さんと一緒に刺身とお酒をいただきながら、高台移転の苦労話を聞きました。こうした、べつに証言を聞きに行くことが目的だったわけではないけれども、「地域のおじいさんおばあさんと語り合った」

場も舞台と呼べるのではないのでしょうか。

國枝 第三者が突然入ってくることで「少し話そうかな」「珍しい機会だからこういう話でもしよう」と思う人もいます。普段なら話さないのに、非体験者がやってくるから言葉が出てくる。外から人がやってくると、新たな言葉が生まれてくる。このような民宿の出会いには本当に偶然的な出会いですね。

清水 民宿では、避難後などのような苦労をしたかとか、補助金で再建したけれどいつまで続けられるかといった話を聞きました。それから二年後に電話すると、「もうやってない」と言われたんです。おばあさん一人で民宿を続けていくのは厳しかったのでしょう。震災の日だけで震災が終わるわけではないのですね。

國枝 震災後は今も続いている。十五年たつと遠い出来事のように思ってしまうのは、私たちが東京

や神奈川にいるからかもしれません。十五年という物理的時間と、体験者の時間は異なります。時計が止まったかのようにずっと生きてもいいし、フラッシュバックのように過去が現在にやってくる方もいらっしゃると思います。人間的な時間は数値化するものではないのです。

●語り続ける

――震災から十五年が経過しましたが、改めて、体験を「語り継ぐ」とはどのような行為なのでしょう。

國枝 「語り継ぐ」ということは、体験の絶対性や神聖さをどこまで尊重するかという難しさがあります。清水さんの本（注3）を読んで印象的だったのは、「意志の継承」という言葉です。語り継ぐことには真実や本音の理解にこだわって記録を継承する面と、メッセージを受け取って自分の生

き方を見つめる意志の継承の面があります。つまり、体験を知ることと、それを自身の問題として自分が受け止めるかは分けて考えることが大切なのではないでしょうか。

清水 「同じ犠牲を二度と繰り返してはいけない」というような意志には、人の思いや感情が関わっています。意志の面において、私たちは死者について「この人はきつこう思っていたのではないか」「本当はこう生きたかったのではないか」と、事実をもとに想像力を使うことで、過去の他人の体験を自分事に近づけていきます。

國枝 現代小説では、登場人物は、「被災者」や「戦争体験者」である前に、具体的な一人の人間として設定されます。物語を通じて、その人の生の営みの重みや日常、価値観から出てくるものを大切にします。そうした人間らしさに対して、体験者ではない自分が何か

を感じることがある。そこに文学作品を読む意義があります。

清水 被災者の生き残りとしてその人を仰ぎ見るのではなく、等身大の人間として向き合う。ともかく、自分とは異なる体験をしてきた人の生の在り方に触れることは、防災の教訓や知識を得る以上の、生きる経験の重みや広がりをお私たちに与えてくれます。

國枝 思想家のツヴェタン・トドロフは、ある過去の出来事に対して二つの態度があることを指摘しています（注4）。一つはそれを未曾有の、不可侵の神聖なるものとして崇めることと、もう一つはその出来事や体験を通俗化して、誰にでも、どこにでもあることだと見なすことです。トドロフによると、大切なのはどちらの態度にも陥ることなく、過去のことから今ある問題にどう立ち向かえるだろうかと考えることです。私も、過去を祭り上げるのではなく、過去を見つめながら今ここで生じて

いる問題に取りかわることが重要なのだと思います。

（構成：藤井美来・宮田智華）



- 注1 金菱清（ゼミナール）編『呼び覚まされる霊性の震災学―3・11生と死のはざま―』、新曜社、二〇一六年
- 注2 グリーフケア・喪失の悲しみへのケア。
- 注3 清水亮・白岩伸也・角田燎編『戦争のかげらを集めて―遠ざかる兵士たちと私たちの歴史実践』、図書出版みぎわ、二〇二四年
- 注4 ツヴェタン・トドロフ『悪の記憶・善の誘惑―二〇世紀から何を学ぶか』、法政大学出版局、二〇〇六年

國枝 孝弘（くにえだ・たかひろ）

総合政策学部教授。

専門は、フランス文学、言語表現論、フランス語教育。

清水 亮（しみず・りょう）

環境情報学部専任講師。

専門は、社会学、フィールドワーク、記憶論、生活史。



災害と

まちづくり

十五年前、地震と津波は人々の暮らしの場に大きな爪痕を残した。日常と非常時のほざまで、まちづくりはいずれ起こる災害に對しどう備えることができるのか。それぞれ異なる角度から被災地のまちづくりに関わってきた小林博人先生と横山大輔先生を訪ねた。

●復興の道のりと共に歩む

——東日本大震災とその復興には、これまでどのように関わってこられましたか。

横山大輔先生（以下、横山） 震災が起きた当時は、国土交通省都市局市街地整備課で土地区画整理事業の担当係長をしていました。その後の復興庁での勤務も合わせて、復興の現場には発災当日から四年弱携わっていたことになりました。

まちづくりは、基本的に市町村が中心となって実施します。ところが、被害の大きかった東北三県（岩手県、宮城県、福島県）では、役場を含めて壊滅してしまった街

が多くありました。また、今回被害を受けた多くの自治体が「面的」な整備（注1）の経験に乏しく、復興まちづくりといっても、どうやればいいのか分からない地域が少なくありませんでした。そこで、当時所属していた課では、直接現地に国の職員が出向いて復興計画の策定支援をする体制や、復興に向けた制度を整えました。また、東日本大震災では巨大な津波が来たこともあり、現状のまま復興することが困難だったため、高台移転や土地の嵩上げに関する政策づくりに取り組みました。復興庁へ異動してからは、福島県いわき市の福島復興局いわき支所に派遣されることになり、津波による被害

からの復興と、福島第一原子力発電所事故に伴う全町避難からの帰還を想定したまちづくりをお手伝いしました。

小林博人先生（以下、小林） 僕は二〇一二年に、宮城県の南三陸で仮設住宅の共同浴場の横に地域の集会所を建設するプロジェクトを手掛けました。被災した地域は木材加工産業が盛んで、建築材など幅広い用途で使用される合板（こうはん）のメーカーの多くは港の近くにたくさん工場を持っているので、津波が来ると真っ先に被害を受けました。海水が染み込んでしまった被災合板を安く譲っていただき、ノッチと呼ばれる切り込みを入れ、それを組み立

てて壁や梁にしました。このような特殊な状況下で、手に入る素材を簡単な方法で組み合わせて集会所を建てたところから、「ベニアハウスプロジェクト」が始まりました。



東日本大震災の被災合板を使った構造物。ノッチと呼ばれる切り込みに板をはめ込んで組み立てる

に取り組む学生が入れ替わりながらも、開発した簡易建築の技術は積み上がり、改善されていきました。東北でこういうことができたのなら海外でもできるはずだということで、それ以降も国内外でプロジェクトを実施しています。

●現場と災害リスク

——都市計画や建築の現場では、普段どのように災害やそのリスクを考慮しているのでしょうか。

横山 まず、都市計画制度の中で主に行われているのは、土地利用のゾーニング（注2）とそれに基づく建築物のコントロールです。この地域だったらこういったものを建ててよい、あるいは建ててはいけないという基準を計画的に作っていくのですが、その中でポイントとなるのが、災害リスクの評価です。

日本の国土は狭く、どこでも災害リスクは存在します。100%

安全な場所に住むのは難しく、どこまでリスクを許容して住むのが問題となります。日本は災害が非常に多いので、防災技術は非常に発達していましたが、都市計画分野において、災害リスクの評価に関する制度構築は遅れていました。平成三十年の西日本豪雨や令和元年の東日本台風など、自然災害が激甚化・頻発化する中、令和二年の法改正によって、ようやく土地利用のコントロールと災害リスクの評価を連動させていくことになりました。

また、人口減少の時代にあって、ここ十年ほどコンパクトシティ（注3）を目指す政策が推進されています。その中で、災害リスクの高い場所は居住誘導区域に設定しないようにするという話も出てきました。今年の三月に都市再生特別措置法等の改正案が出され、災害ハザードがある場所は居住誘導区域から除外されることになりました。

横山 大輔

小林 博人



小林 災害にどう対応するかという点で、建築が構造上の強さを求めているのは間違いありません。ただ、堅牢な建築について考える上で、日本では「柔らかな建築」が作られてきたことはとても特徴的です。例えば都心部の超高層ビルは、柔構造と呼ばれるような、木造建築の考え方に根ざした柔軟な構造で作られています。地震が起きた時はものすごく揺れますが、大きい力をしなやかに受け流すことができます。

また、建築基準法をはじめとした様々な法律や、都市計画のゾーニングは、もちろん普段の建築の現場では遵守されます。他方で、仮設建築など、災害が発生した際に迅速な対応が求められる建築物に対しては、法律の制約が緩和されたりもします。その程度は現場ごとに行政が決定していきます。

横山 緩和の程度は自治体ごとに全然違いますね。柔軟なところもあれば堅いところもあるので。

小林 十五年というのはすごく長い時間だったし、失われた人たちは帰ってこない。寂しさ、悲しさがそこにはある。そういう中で、どうやって自分たちの自信や人間関係を回復していくかが求められていると思うんです。

例えば、まだ自分の町に帰れない人たちがいる。あの地震の瞬間から突然分断されて、コミュニティも家族もバラバラになり、一緒に戻れないことはもう分かっている。それは本当につらいことで、この問題はまだ解決されていない

と感じます。その時まで育んできた人間関係や地域の文化を、たとえそこに戻れなかったとしても、どうやって回復できるか。このことをもう少し考えなければいけないと感じています。

横山 都市計画や都市の空間的な観点からは二つの課題が見えてきました。まず、一般的には十年から二十年ぐらいのスパンで行う土地区画整理事業が、東日本大震災後の被災地では、人と資源とを特徴的な形で集中投資することによって、五年程度で完了しました。これは、通常では考えられないようなスピードです。しかし、いく

ら数年だとしても、被災した方々にとってその数年は非常に大きいものです。仮設住宅には入れたけれども、その先の将来を見通せず不安を感じている方はたくさんいらっしゃると思います。自治体の職員も非常に頑張っていて、被災直後から住民の皆様に繰り返し意見を聴取しながら、その時の最適解を設定し

て事業を始めました。でも、被災者の方々は一日を待ってられないんです。とにかくこの不安な生活から抜け出したいという思いで、区画整理で受け取れる土地とは別の場所に家を建てたり、特にご高齢の方だと、災害公営住宅に入ったりした方も多くいらっしゃると思います。その結果、今の被災三県では、区画整理事業で整備した土地において空き地のまま残っている場所もあります。税金を使っているのに需要と供給のバランスがうまく取れなかった事態については、今後考えていかなければなりません。

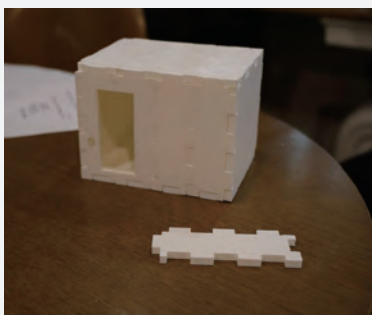
また、東日本大震災や能登半島地震は、もともと高齢化が進み、人口が減少している地域で発生したため、一層その傾向が加速してしまいました。自治体の首長の方々は震災以前よりも良い町に復興したいという強い思いを持っています

ますが、その一方で人口はどんな

どん減っています。被災した集落をかつてと同じように復興させるのが本当に良いことなのか。これは冷静に考えなければいけないと思います。より良いまちをつくるのは当然ですけども、その先の数十年後を見据えた上で、適切な規模で復興することができるか。その点、能登の輪島市では、被災以前からあったまちづくりの課題を復興の段階で一緒に解決するような取り組みが行われています。

小林 被害を受けた時に、復興に加えて、今まで抱えていた課題に取り組んでいくのは大切なことです。ね。

横山 とても大事なことです。東日本大震災では、沿岸の壊滅した集落をもう一度復興させるという意図で復興計画が作られました。が、一部の自治体では、その集落が現在のまちづくり計画において拠点と位置付けられていないケースもあります。落ちていて先を見据えるべきだったかもしれない。



簡易建築の一例（模型）。1種類のパネルから床・壁・天井ができています。

個人的にはそう思います。

●ソフトなまちづくりの可能性

小林 東日本大震災の時、最初とはにかく皆さんの集まる場所を作らなければいけないと思っていました。でも、僕たちが行っているというやり方には弱点があることに気付きました。使う人は、その建物に不具合が生じた時に自分たちで直すことができない。僕たちやプロの大人さんがどういうふうに作ったのかを知らないからです。少し壊れたところが出たりすると、そのまま放置されてしまい、最後には取り壊すことになってし

まう。

大切なのは、利用者自身にも作ってもらえるように、シンプルな作り方の家を提供することだったんです。そうすれば、素人でもみんなで集まって作れるし、自分たちで修繕することだってできる。みんなで作れば人同士の結束が強くなるし、自分の居場所ができるというとても良い効果も生まれます。プロジェクトを重ねる中で、「建物を使う人が作る」のが一番健全で、長持ちすることに気付きました。また、できるだけその場所に生きる人たちが望むものを、その場所にある材料で作る。そうすると、彼らのプライドが戻ってくる。僕たちは黒子になって、その人たちが主役として作るのをサポートする。それが、この十五年でやってきたことですね。

まちづくりの観点からしても、コミュニティのネットワークは災害に対する力強い備えになりますし、このことは再認識されてきて

います。ちょっとしたことで日常的にみんなですれ違う話合っで助け合っていると、大きなことが起きた時に迅速にまとまって動くことができる。また、災害時には、それまでのコミュニティが分断されてしまうこともあります。一緒にものを作ることで、少しでもお互いが知り合いになる。新しいコミュニティを作るアクションとしても、みんなでものを作ることとは大事です。

世界には、ハード面では脆弱でも、コミュニティとしてはとても結束している地域もあります。実際に見て回ると、そちらの方が安全なんじゃないかと感じることもありました。そういった意味で、災害とまちづくりについて考える際には、日本の大都市における人間関係の希薄さにも目を向けていかなければなりません。

横山 確かに、集合住宅に住んでいると隣近所をほとんど知らないです。災害が起きたその瞬間

命が助かって、命が続くかはまた別の問題です。その後も命を守ることを考えると、やはり一人じゃ生きていけないと感じますね。

●事前に備える、蓄える

小林 災害が起きることを前提に、それに「備える」建築を作ることもできるはず。簡易建築だとしても、災害が起きてから材料を切り出しているのは当然間に合いません。だから、事前に材料を

備蓄する。ただ、いつ起こるか分からない災害のために、一つの自治体で何百棟分も備蓄することは現実的ではありません。大切なのは、建築にも非日常と日常の考え方をうまく取り入れることです。例えば、日常的に使っているブー

や学校の読書ブースなど、日常で使っているものを、非常時にまとめて被災地で活用するという方法です。地震が起きた際、必要なものが一箇所にまとまっているという

ろいろな意味でリスクが高いので、このような分散的でモバイル（移築可能）なアイデアは非常に有効です。適材適所、適切なタイミングで必要な人たちの場所に届くようにするために、僕は簡易で

モバイルな建築の研究を進めていきたいですね。
横山 今出てきた「備え」というのは重要なキーワードだと思います。東日本大震災以降、都市計画の分野では、事前復興計画の作成を各自自治体においています。どこでどんな災害が発生するかをシミュレーションした上で、被災

く災害と付き合わないといけない。被災することを前提に、まちをどう作り直すかをあらかじめ考えて訓練しておくという流れができたのは、この十年、十五年で大きく変わったところです。

●技術を繋げる

——時間が経過するにつれて、都市計画や建築の分野でも震災を経験していない世代が次の担い手になっていきます。そのような点で生まれる難しさはありますか。

横山 課題はありますね。都市計画分野では、例えば、区画整理技術がこのままだと衰退していく可能性があります。高度経済成長期はニュータウン開発事業があったり、近年では駅前再開発の際に区画整理を実施したりしています。が、そもそも事業数自体が少なくなっていて、今後は区画整理を経験する場がどんどん減っていきま

承されない。国にもどうにかしなければならぬという思いはあるものの、なかなか答えは出ないですね。

小林 僕の場合は、国内外問わず災害が起こった時には、学生たちと一緒にできるだけ現場に行って話を聞き、プロジェクトを実施しています。現場に足を運ぶことで、自分たちも備えなければいけないと考えるし、それを伝えたいという気持ちにもなる。可能な限りリスクを伴わないようにしつつ、学生たちに一緒に経験してもらうことは大事です。

横山 経験しているかしていないか、これは雲泥の差だと思います。復旧復興にかかわらずどの分野でもそうかもしれませんが、考えた経験があれば、危機が目の前に起きた時に冷静に対応し、なんとか知恵を絞って解を見つけることができるはず。

小林 震災が起きてみないと、みんな気付かないからね。そういう

意味では、僕たちは経験してしまっただけから、真剣に考えることができる。これを生かさなかったらまずいわけです。でも、時間の経過と共に風化してしまう面もあります。

横山 そうなんですよね。真剣に考え続けるという意味で、伝承はとても重要なことです。

●いざ起きるものと向き合うために

——これからのまちづくりは、災害とどのように向き合っていくことができるでしょうか。

小林 災害はない方がいい。絶対に起きない方がいい。でも、自然は人間がコントロールできるものではない。寄り添って生きていくしかない。けれども、全く知識もなく、スキルもなく自然と

共に生きることが、被害を大きくしてしまう。やはり自分たちの心構えと、それに対するスキルも含

めて準備をしておくことが何よりも大切です。

僕たちは十五年前に大地震を経験したし、その後も災害は起きている。それを他人事だと思わずに、自分ならどう対応するのかを考え続けなければなりません。まちづくりは、そういう取り組みを複数人でまとまってやっていく営みです。まちづくりの中でみんなが備える。それはソフトの部分でも、ハードの部分でもそうです。

また、世界に目を向けることも大切です。日本は災害が多い国だけれども、同時に世界でも自然災害は起きています。逆に言えば、お互いに持っている知識や経験を共有することもできる。他の場所で発生している災害についてお互いに知っておくことは決して無駄ではないはずです。

横山 おっしゃる通りです。繰り返しになりますが、私たちは災害と無関係ではられません。いかに折り合いをつけて賢く付き合っ

ていくのかを肝に銘じないといけないと思います。

（構成・岡田奈和実）

注1 面的な整備…まちづくりの方法の一つで、まとまった規模の区域において、道路・公園・下水道等の都市施設整備と宅地開発を一体的に行うこと。

注2 ゾーニング…都市計画分野において、土地を特定の利用目的によって区分し、一定の均一な規制を設定すること。

注3 コンパクトシティ…生活利便の維持・向上、地域経済の活性化、行政コストの削減を目的として、居住や生活サービスの機能を拠点エリアに集約させた都市構造。

小林 博人（こばやし・ひろと）

政策・メディア研究科教授兼環境情報学部教授、建築家。
専門は、建築・都市地方デザイン、まちづくり。

横山 大輔（よこやま・だいすけ）

環境情報学部准教授（有期）。
専門は、都市・地域計画、都市開発。



本特集「15年目の3・11」では、地震学や防災、語りや継承、復興、まちづくりなど、複数の観点から3・11を考えてきた。本特集を通じて扱ったテーマ以外にも、災害や防災を巡る視点や論点はたくさんある。

例えば、自然災害には地震や津波以外にも様々なものがある。台風、洪水、土砂災害はもはや身近な災害として挙げられるだろうし、頻度は少ないものの、活火山の噴火も古くから繰り返す自然災害だ。人間社会の事情にかかわらず、地球は絶え間なく動く。災害が起こる度、この世界は人間を中心に動いているわけではないことを思い出さざるを得ない。

自然災害に伴う様々な問題にも目を向けなければならない。一九二三年に起きた関東大震災では、発災後の混乱の中、デマを発端として警察や自警団が多数の朝鮮人や中国人などを虐殺する事件が各地で発生した。先行きの見

えない不安定な情勢下で、フェイクニュースがかつてないほど重大な影響力を持つ現在、災害時の情報伝達やデマの流布について適切な対策を講じることは喫緊の課題だ。さらには、プライバシーの確保が困難な環境、長期化する避難所生活による精神的疲弊、避難所内での性暴力など、発災後の避難所生活での諸問題も見過ごせない。

また、東日本大震災では、地震と津波による甚大な被害に加え、福島第一原子力発電所の事故が国内外に大きな衝撃をもたらした。自然災害が引き金となり、人間の技術や判断が被害を増幅させたとも言えるこの事故は、科学や社会の在り方を考え直さなければならぬことを私たちに突きつけた。

発災からの十五年間、私たちの社会は、災害によって示されたこれらの問いにどれほど向き合ってこられただろうか。

もちろん、私たちは常に災害のこと

ばかり気に掛けて生活するわけにはいかない。また、災害に関する視点は実に多様で、その果てしなさに無力感を覚えることもあるかもしれない。しかし、見方を変えれば、視点が多様であるが故、私たちは生活のあらゆる場面で災害を考えていくことができるのだ。

本記事では、こうした多層的な災害の視点を念頭に置きながら、私たちの生と災害との関わりを改めて問いた

い。そして、災害や防災は、特にここ日本列島において、これからも考え続けなければならないテーマである。災害という非日常が流れ込んでくる可能性と常に隣り合わせの日常を生きる私たちは、今、どのように考え、どのように備え、どのような態度で日々の生活を送ることができるのだろうか。

東日本大震災から15年という大きな節目を迎えた2026年。震災の記憶を風化させないことはもとより、今この時代に求められているのは、地震を単なる物理的な破壊現象や人間社会の災厄として捉えるだけでなく、地球上に生きる全生命を包括し、多角的に再定義することではないだろうか。いまだ科学的な解明が待たれる「地震の前兆現象」に対し、私たちはどのような眼差しを向けるべきか。ここでは、動物の異常行動がアカデミアにおいていかに扱われているかについて触れた上で、SFCという広大なフィールドの実践知として捉え直す意義について考察したい。

池谷（1998）によれば、1995年の兵庫県南部地震の直前、神戸市立王子動物園において動物の行動に顕著な異変が確認されていた。当時の榎藤真禎園長による報告では、地震前日にアシカが激しく騒ぎ給餌を拒否した他、ワニが飼育室のガラスを激しく引っかくなどの行動が見られたという。また、同氏の自宅においても、飼育犬が怯えるような様子を見せていたと記録されている。このような地震直前の「動物異常行動」については、古来より数多くの報告がなされてきた。その物理的要因として、岩石の破壊に伴う微小振動、磁気異常、地下ガスの放出、あるいは大気中の帯電した微細な粒子（帯電エアロゾル）の増加などが仮説として提唱されている。一方で、心理学的な側面からは、事象の発生後に記憶を再構成してしまう「後知恵バイアス（hindsight bias）」や、非科学的な「虫の知らせ」に過ぎないとして、報告の信憑性に懐疑的な見方も少なくない。

上で述べたように、地震は突発的な現象であるが故に、定量的データの収集は困難を極める。しかし、広大なフィールドを有するSFCにおいて、野生生物や学内の生態系が示す微細な変化を、より注意深く観察・記録し続けることは可能であろう。そのようにして蓄積されたデータによって、未知の現象を解明したり、論争中の説を検証したりできるようになることも、期待してよいのではないだろうか。

・参考文献

池谷元伺『地震の前、なぜ動物は騒ぐのか：電磁気地震学の誕生』、日本放送出版協会、1998年

記憶の媒体としての口承文芸 （災害と痛みの記憶をつなぐ物語）

太宰治を父親に持つ津島佑子の『ジャッカ・ドフニ 海の記憶の物語』。本書のストーリーは、物語や歌などのアイヌの口承文芸、そしてオーラルヒストリーと密接に絡み合いながら展開する。物語全体を通じて、「痛みの記憶」の伝播や、記憶そのものの曖昧さも、主題となっている。

特に印象深いのは、冒頭に登場する一編のアイヌ神謡だ。息子を亡くし、一人で思い出の地を旅する「わたし」の物語の合間に、その神謡は差し込まれる。大津波の後に一人生き残り、泣きながら海を漂流していた老巫女が神々によって蟬に姿を変えられ、夏の間だけ人間の村に現れては泣き声を響かせるという話だ。「わたし」はこの神謡を思い返ししながら、東日本大震災の津波で失われた多くの子どもたちに思いをはせ、同時に、自身が引きずり続ける個人的な喪失の記憶を呼び起こしていく。

生と死との、あまりにあからさまな境界。何年経っても、その境界を受け入れることがわたしにもできなかった。(p. 13)

そう語る「わたし」の記憶や感覚が、時間の経過と共にぼやけつつあることに、読み手は次第に気付かされる。しかし、記憶は曖昧になりつつも、「わたし」が受けた母子家庭の苦しみや息子の死という私的な悲痛は、「ヒバクシャ」や「土人」といった歴史的な痛み、さらには震災という不条理な災害の記憶とも境界を失って共鳴し、確実に切実さを増していく。このやるせなさこそが、個人の枠を超えて物語全体に伝播していくのだ。

現在がどこまでもつづき、現在しか見えず、背中のうしろには、いつもなにかがうごめいているのを感じつづけ、けれど振り返れば、そんなものはずっと消えてしまう。なにひとつ、現在のあなたの手もとに取り戻せない。(p. 27)

この「わたし」の言葉は、本作における記憶の在り方を雄弁に物語っている。記憶は確固たる事実としては掴めず、振り返れば消えてしまうが、それほどにぼやけながら、私たちの背後には確かに過去の「痛みの記憶」がうごめいている。災害や歴史の荒波の中で、完全には理解し得ない他者の喪失を、それでも語り継ぎ、擬似的に追体験していくこと。それこそが記憶の本質であることを、この言葉は見事に射抜いているのではないだろうか。

・参考文献

津島佑子『ジャッカ・ドフニ 海の記憶の物語 上』、集英社、2018年

今年の三月十一日、つまり「15年目の3・11」、皆さんは黙祷を捧げただろうか。そもそも、十五年がたった今、黙祷を捧げたり、それ以外の形で震災の犠牲者を追悼し続けることには一体どんな意義があるのだろうか。

悼むひと

追悼を考えるに当たって、ジュディス・バトラーが提唱した「哀悼可能性 (grievability)」を紹介したい。バトラーによると、ある人々が生きるに値すると見なされ、その生を保障されることの前提は、その死が嘆き悲しまれるだろうという哀悼可能性によって支えられている。「悲しむに値すること」が、「意味を持つ生」の前提条件なのである。そしてこの哀悼可能性は、常に政治や社会による選別を受けているという。自然災害だけでなく、公害、テロ、事故、事件、戦争などの特定の状況下での死について、身内の間での葬儀などに留まらず、慰霊や追悼という社会的な悼みがなされる時、社会的に哀悼されるべき死が生まれると同時に、そうでないと見なされる死が存在するからだ。

文字通りに全ての死を追悼することは不可能かもしれない。しかし、それでもなお、より多くの死（数量的な多さではなく、数えきれない個々人の死）を一つ一つ悼むこと、そうしようとするからこそ、命を尊重する社会への希望があるように思えてならない。

来たる災害に備えて

最後に、私たちの実生活にとって重大な問いを考えよう。すなわち、来たる災害にどう備えるかである。

キャンパスで被災したら？ アルバイト先で被災したら？ 通学中に被災したら？ いざその場面を具体的に想像してみると、防災とは非常食や懐中電灯を揃えることだけではないと気が付く。どこに逃げるか、誰と連絡を取るか、その時そばにいるのは誰か。多くの場合、そのヒントは日常生活の無意識的なルーティンや思考の習慣、日頃の人間関係の中にある。

見知らぬ人に声を掛けられるか。近くに住む人の顔を知っているか。いざという時に助けを求められる関係があるか。非常事態では、手に入る情報も考えるための時間

も限られる。そのような状況下でどのような判断を下すのか。防災は、非常時のための特別な準備であると同時に、日常をいかに生きるかという問いと地続きだ。なお、大木聖子研究会では、防災を自分のこととして考えるための防災教育の一つとして「防災小説」を活用している。参加者は、特定の日時や天気など、あらかじめ定められた条件下での災害の発生を想定し、自身を主人公として物語を書く。その過程を通して、非常時への備えと日常への問いかけを行っているのだ。

災害は時に新たな視点を私たちに与える。日々の暮らしの中で、多様な視点と結びつけながら、常に日常の隣に可能性として潜む災害について考え続けること。それは決して、絶えず不安を抱えて生きることではなく、今ここにある生を、より深く考えていくことなのかもしれない。

（構成：平野瑠理・松本こころ）

・参考文献

Judith Butler (2016) *Frames of War: When Is Life Grievable?*, Verso

SFCの先へ

連載

No. 1



SFCを羽ばたいた後、人はどこへ向かうのか。その活躍の形は、きっと多様である。本連載では、実社会に出て働いている卒業生に焦点を当て、日常の中に、SFCの学生として過ごした時間がどのように息づいているのかを探る。卒業生の数だけある「活躍」を再定義しよう。

第1回では、2021年度に総合政策学部を卒業し、現在は清水建設株式会社に勤める古野微麗^{れい}さんがこれまでの道のを語ってくれた。

「目の前にあったから、やった」
二年間のギャップイヤー、そして設備の仕事との出会い

——現在、清水建設ではどのようなお仕事をされているのでしょうか。また、その道に進むきっかけとなった経験について教えてください。

現在は設備企画部という部署にいます。主に設備施工系人材の採用や教育を業務とする部署です。現在の業務の中心になっているのは、新入社員が「施工管理技士」という現場管理に必要な国家資格を取得するための勉強会を企画・実施することです。

実は、私は高校から大学に入るまでに、二年間のギャップイヤーを過ごしました。高校時代はクラスで成績が一番下から数えた方が早いぐらい勉強が苦手で、大学入試も、進学先の目標が高過ぎたせ

いで、全敗してしまいました。受験に限らず「頑張ってもどうにもならない」領域もあるのだと、考えさせられることが何度かあったんです。良い意味での諦めというか、楽観的な感覚が身に付きまして。そこからは、自分が得意な領域を頑張ろうという考え方になりました。

その二年間は、父の設備系の仕事を手伝っていました。それを選んだ動機は、面白いからというよりも、目の前にあったからです。やれば給料ももらえるし。そういう現実的なものでした。この期間も受験勉強は続けていました。けれども、丸々一年間勉強だけをしていると身が持たない気がして、半年は父と仕事をし、残りの半年は受験勉強をするというサイクルにしました。その間に、現場の資格も取ったんですよ。当時、熱中症対策として神奈川県公立学校が一斉にエアコンを導入し始めたため、エアコンを設置する仕事

がたくさんありました。和式トイレを洋式トイレへ交換するような仕事もありました。それは、トイレをきれいにすると非行少年が減ると巷で言われていたからだそうです。学校であれ公共施設であれ、空調や情報通信設備など建物の設備は年々増えていました。また、ある工場では、取り扱う製品が変わり、クリーンルーム（防塵室）を作るなどの案件が発生したこともありました。そのおかげで、メーカーの設備投資の動きなどをかなり近いところで体感できたと思います。父の仕事を手伝いながら、社会の変動と設備の仕事との繋がりを自然と体験していたのかもしれない。

——ギャップイヤーを経て、SFCを進学先に選んだのはなぜですか。

家からキャンパスが近かったからです（笑）。当時始まったばかり。

りだった「情報」科目で受験すれば、合格の可能性が高くなるのではないかという現実的な考えもありました。僕の場合、高校の授業で「情報」が本格的に扱われることはあまりなかったような気がします。けれども、「情報」の内容はもともと好きでしたから、自分でITパスポート試験（注1）のテキストを買って読んだり、過去問を解いたりして独学し、SFCを受験しました。「情報」科目を入試で選択することは当時珍しかったようで、私の周りには、同じ科目選択で合格した同期生はほとんどいませんでした。

興味の赴くままに。マルチな経験を育んだSFC時代

——SFCでは建築・情報・法律と多岐にわたる分野を学ばれたそうですね。どのような研究をなさっていたのでしょうか。

最初は池田靖史（元政策・メデイ

「ア研究科教授」研究会で、建築を情報学の観点から捉え直す「建築情報学」という新しい領域を学び、当時最先端だったMicrosoft社のHoloLensというゴーグルの技術を建築でも活用するという技術研究に触れました。他方、新しいものを建築に取り入れようとすると、法律の壁にぶつかることがあります。そこで、新領域の法学を扱う新保史生（総合政策学部教授）研究会や齊藤邦史（総合政策学部准教授）研究会に所属しました。卒業プロジェクトは、新保先生に指導教員になっていただき、「建築物が意匠法の保護対象に含まれる法改正」をテーマにした論文を書きました。テーマについてはかなり悩んだのですが、当時法改正が大きな話題になっていましたし、データを集めて書き切りやすいもののように思いました。この時も、決め手になったのは現実的な理由です。将来もし大学院に行く機会があれば、別のテーマも

扱いたいと考えることもありま
す。

——そうした研究を機に、清水建設への入社が決まったのでしょうか。

池田研究会で学んでいたことを面接で話したら、とても良い評価を頂きました。総合建設業者はまさに同じような分野を研究している部分もあったからだと思えます。他の建設会社や、違う業界の会社にもいくつか応募を出しましたが、清水建設の社風が最も自分に合っていると感じ、入社を決めました。大変なこともたくさんありますが、入社前に感じていた雰囲気は、入社後も変わらず実感しています。

——SFCでの活動で、特に印象に残っているエピソードを教えてください。

自分の興味があるものや、得意なこといろいろな手を出す性格だったので、SFC CLIP（注2）で学事に関する記事を執筆したり、SFCの福利厚生団体である音像工房で授業の際のθ館のディスプレイの操作補助を主に行ったりしていました。それから秋祭実行委員会（注3）や七夕祭実行委員会にも入っていました。

（笑）。ただ、風は吹き荒れていた
ので、テントが吹き飛ぶ危険性を
考えれば、中止の判断は間違っ
ていなかった。自分が得られる限
られた情報の中で、その場で意見
を出し、決断を下したことは良い
経験でしたし、現在の仕事のスタ
ンスにも影響を与えていると思っ
ています。

理想に縛られず、目の前のリ
アルに誠実に向き合う

——実際に入社してからのやりが
いや大変なことを教えてください。

日々の仕事は大変なことだらけ
です。入社一年目に麻布台ヒルズ
の建設現場に配属されましたが、
当時はコロナ禍で材料が届かず、
職人の方々の人数も制限されるの
に、引き渡し納期は絶対に動かせ
ないという板挟みの状態でした。
その場で瞬時の判断を迫られ、慌
てて出した指示が間違っていて二

度手間になってしまったということ
もありました。現場の職人にとっ
ては、新人である私も、清水建設
の制服を着ていれば指示を出す側
です。質問されて「分かりません」
と答えるわけにはいきません。ど
うにか正しい指示を届けようと走
り回る毎日でした。

現在、先ほどもお話ししたよう
に、設備工事の施工管理者を育成
する役割を担当しています。この
仕事は、直接的に建物を建てると
いうわけではありませんが、我々
が組んだ研修プログラムが日々の
施工管理業務の一助になるという
ふうに考えています。新入社員が
数年後現場を経験して専門的な会
話ができるようになるなど、成長
した姿を見ると感動する面もあり
ます。

僕は、「夢」と呼ばれるような
ものを持っていないように思いま
す。部活でもサークルでも、ベス
ト何位とか、はっきりとした目標
を掲げてそれを目指すのではな
く、自分が得意で成果が出やすい
領域を、なんとなくやってきた。
いろいろなものに手を出して、う
まくいったりいかなかったりす
る中で、それでもずっと続けてきた
ものが形になり、今ここにいます
という感覚です。

（構成・服部琴夏）



古野 微麗（ふるの・れい）

2021年度に総合政策学部を卒業し、清水建設株式会社に就職。

現在は建築総本部 設備本部 設備企画部で勤務。
在学時は、池田靖史研究会、新保史生研究会、齊藤邦史研究会に所属し、建築と法律に関連づけて研究していた。

- 注1 ITパスポート試験…経済産業省が所管する国家試験「情報処理技術者試験」の一つ。ITに関する基礎的な能力の証明となる。
- 注2 SFC CLIP：SFCに関連するニュースを配信するサイト。有志の学生が自主的に取材・編集・制作活動を行っている。
- 注3 秋祭実行委員会：二〇二一年まで毎年十月に開催されていたSFCの秋の学園祭（現在は夏の七夕祭に統合）の運営組織。

スペシャリストとして教壇に立つSFCの先生方。普段は見えない日常の習慣やこだわりをのぞき見たい。第三回は伴野崇生先生に、日頃から行っているという散歩についてお話いただいた。

「毎日同じことをしない」というこだわり

——先生のルーティンやこだわりは何でしょうか。

ルーティンというと、毎日同じことをするイメージがありますが、意識的に毎日同じ行動をしないようにすることが私のルーティンだと思っています。というのも、いつも同じことをするのが好きで



はないからです。違う人に会いたい、違う場所に行きたい、違うことをしたいという気持ちはずっとあります。

散歩の原点はSFCで過ごした学生時代

——散歩が趣味であると伺いました。いつから始められたのですか。

SFCに入学した頃からです。高校までは学校と家の往復でしたが、大学生になると、自分のペースで何でもできますよね。思い立った時に自由に動けるようになった。それで、散歩を始めたのだと記憶しています。また、SFCが思っていたより

田舎だったというのにも影響しているのかもしれませんが。私は愛知県豊田市出身で、「東京の方」に行くつもりで大学に入学しました。でも、SFC周辺は故郷と変わらない風景。安心感はあったけれど、イメージしていた首都圏とはギャップがあった。それで、用もなく日吉や三田に行ってみたり、吉祥寺でアルバイトをしてみたりしていました。見たことのない場所、まだ知らない所に行きたいという気持ちに突き動かされて、あえて遠くに行く。それが最初の「散歩のようなもの」だったと思います。

今も、一週間に一回は散歩をしています。私は、バイクや自動車の運転免許を持っていないんですよ。その結果、歩くか自転車に乗るかしかないことが多くなるわけですが、それは私にとってはむしろ都合がいいんです。

偶然的発見を面白がる姿勢——たしかに、車で移動するよりも、足で歩く方が、路地の細かい機微や街の変化のようなものは感じられますね。先生は、どういうふうに散歩をすることが多いのでしょうか。

地図を見ず、ひたすら気の向くままにただ歩いていきます。その中でたまたま何かを見つけようかな、そういう発見にすごく面白みを感じるんですよね。例えば、山手線の駅から駅までの間をよく歩きます。どこの駅にもスターバックスコーヒーやセブン・イレブンはある。でも、変わらない風景の中にも、やはり駅ごとに違うものがある。「こんな所にマッサージ屋があるんだ。今度行こう」「ここ、強盗が入ったってニュースで言ってたところだ。大丈夫かな」。そういう何かしらの発見や気持ちの動きがあるわけです。誰かに

シェアしたところで「それで？」と言われてしまいそうな、特別な意味もないように見えることかもしれません。でも、そんな発見に面白みを感じます。

「反対に、目的地を決めてフィールドワーク気分散歩に出かけることもあります。東京にあるディープスポット（注）だけを掲載している「東京DEEP案内」というサイトをご存じでしょうか。そのサイトに載っている場所をひたすら巡っていた時期もありました。それもやはり、まだ知らないことを知りたい、という気持ちでやっていったように思います。

こと」をするためかもしれません。仕事柄、文章を書いたり教えたりのことが多いですし、何も考えないぞと思ったところで何かしらを考え始めてしまう。でも、散歩をしている間は、本当にボーっとすることが出来る。寝るのとも違う、ボーっとする時間を意識的に作ることができるから今でも続けているのだと思います。

——余白を作るために散歩をしている、という感じでしょうか。先生にとって、散歩にはどういう意味がありますか。

散歩は、自分の枠では気付けないことや、いつもなら見逃してしまつものに出会う機会だと思っています。例えば、「あ、もう秋になったな」と、花を見たり風を感じたりして気付く。

散歩に行くのは、「何もしない

いたいのだろうと思います。そして、人間と関わり合っていたいんです。一人でいるのも全く苦ではありませんが、初めて行った場所で、何かのきっかけで、急に人との関わりができる。そういうイレギュラーなことが大好きです。旅行でも想定外の出来事が起きると楽しくなります。他にも難民支援のボランティアを二十年近くしています。人が関わることで、その関わりによって思いもよらない何かが生まれる瞬間がある。だからずっと続いているんだと思います。

「違うこと」を面白がれる感覚は、SFCで過ごした四年間で育まれたように思います。なにしろSFCは、違う領域や違う事柄が身近にたくさん散らばっていて、そつした違いを、壁ではなく、むしろ面白さとして捉えられる場ですからね。

（構成：井庭晴香・松本こころ）



伴野 崇生
(ともの・たかお)

総合政策学部准教授（有期）。専門は、日本語教育、文化心理学、難民研究。

注 ディープスポット…一般的な観光ガイドブックにはあまり載っていないような、独特の雰囲気を持つ場所や穴場的な裏スポット。

S F Cにどんな人がいるのか知りたい

雑誌がどのように作られているか気になる

写真を撮るのが好き

文章を書くのが好き

ナカマが欲しいカモ。

印刷物が好き

S F Cの先生、学生、
卒業生にインタビューしたい

雑誌を眺めるのが好き

D T Pデザインに挑戦したい

S F Cが大好き！

企画を考えるのが好き

グラフィックデザインが得意

出版に興味がある

KEIO SFC REVIEW

学生編集員大募集

KEIO SFC REVIEW は

慶應S F C学会が発行するオフィシャル広報誌。

学生が主体となって、企画・取材・編集を行っています。

あなたも一緒に

KEIO SFC REVIEW を作りませんか？



バックナンバーは右下 QR コードから
オンラインでもご覧いただけます

3月
発行

7月
発行

11月
発行

企画 依頼 取材 執筆 レイアウト 校正 校了 配布

企画 依頼 取材 執筆 レイアウト 校正 校了 配布



1年間の活動スケジュール（上図）

基本的に週に1コマのミーティングがあります。
2026年度春学期は火曜日6限に行っています。
1年生でも、企画、インタビュー、写真撮影、記事執筆、誌面デザインなど、ほぼ全ての工程に関わることができます。経験がなくてももちろん大丈夫です！先輩が優しく教えてくれます。

見学希望の方はお気軽にご連絡ください
KEIO SFC REVIEW 編集部メールアドレス
keio-sfc-review@sfc.keio.ac.jp
Web サイトはこちら→
<https://gakkai.sfc.keio.ac.jp/review/jp/>



編集後記

慶應 SFC 学会

発行人 黒田 裕樹 (会長 / 環境情報学部教授)
担当理事 宮代 康文 (総合政策学部教授)
事務局 田坂 真美

編集長 松本 ころこ (総合政策学部 4 年)

副編集長 岡田 奈和実 (総合政策学部 3 年)
宮田 智華 (総合政策学部 3 年)

編集委員 平野 瑠理 (総合政策学部 4 年)
井庭 晴香 (環境情報学部 4 年)
藤井 美来 (環境情報学部 4 年)
吉松 野乃子 (総合政策学部 3 年)
高坂 真優佳 (総合政策学部 2 年)
服部 琴夏 (総合政策学部 2 年)
宮野 眞陽 (総合政策学部 2 年)
倉井 澄 (総合政策学部 1 年)
菅原 晴斗 (環境情報学部 1 年)

表紙 / 誌面デザイン

宮田 智華 (総合政策学部 3 年)

写真提供

大木聖子研究会の皆様
岡田 奈和実 (総合政策学部 3 年)

KEIO SFC REVIEW第83号『15年目の3・11』を手に取っていただきありがとうございます。今号の制作は、発災から15年という一つの節目を迎えた今年、2011年3月11日の大地震とその後の15年間を、SFCとして改めて振り返りたいという思いから始まりました。

SFCで、またその他のあらゆる場所で、これからも日常は続いていきます。その日常は、15年前の災害の記憶と共にあります。同時に、これから起こりうる災害とも隣り合わせです。編集部員の中に、東日本大震災によって大きな被害を受けた人はいません。それでも今回このようにして特集を組んだことで、様々な方のお話に耳を傾け、知らなかったことを学び、もっと知りたいという思いが生まれました。読者の皆様の中にも、被災地から離れた場所で震災を経験された方や、15年の月日と共に記憶が遠ざかっていったように思える方は多いのではないのでしょうか。今号が、私たちと東日本大震災や災害との関係性を改めて考え直す、一つの機会となれば幸いです。

今号では、第79号から続く連載「のぞき見ルーティン」に加え、新連載「SFCの、その先へ」が始まりました。本誌では過去に「Co-net」と冠した卒業生へのインタビューを連載しておりましたが、この度の新連載は、会社員をはじめとする実社会に出て働く卒業生に焦点を当てているのが特徴です。ぜひ併せてお楽しみください。

改めまして、取材や寄稿にご協力いただいた皆様、本当にありがとうございました。今後とも、KEIO SFC REVIEWをどうぞよろしくお願いいたします。

2026.7.7 編集長 松本ころこ

発行日 2026 年 7 月 31 日

発行所 慶應SFC学会
〒 252-0816 神奈川県藤沢市遠藤 5322
0466-49-3437
<https://gakkai.sfc.keio.ac.jp/>
keio-sfc-review@sfc.keio.ac.jp

無断転載・複製を禁じます。ご相談は慶應SFC学会までお寄せください。



こちら (<https://gakkai.sfc.keio.ac.jp/review/jp/>) から一部のバックナンバーをご覧いただけます。



KEIO SFC REVIEW No. 83

ISSN 1343-3318

発行所 / 慶應SFC学会

<https://gakkai.sfc.keio.ac.jp/>